論 文

心理学研究方法論をめぐる省察

― 心理学の人称性；我，汝，誰彼の心理学 ―

吉 田 章 宏

淑徳大学大学院研究紀要 第9号 抜刷 2002

論　文

心理学研究方法論をめぐる省察*

－ 心理学の人称性；我，汝，誰彼の心理学 －

吉　田　章　宏※

はじめに

私が心理学という学問の存在を初めて知り，それを学び始めた時から，既に五十年近くの年月が過ぎ去っている。五十年という，考えようによって，長くもあり短くもある時間を経た私の心理学における「来し方」を省みるとき，私の怠惰にもかかわらず，図らずも，多種多様な心理学と研究に接し関わる機会に恵まれたことに気づく。そして，そのことを，何はともあれ有り難く思う。私は，人一倍好奇心が強いのであろうか，結果として，私が接し関わることになった心理学は，どうやら，通常の心理学研究者の方々より以上に，多種多様になった模様である。ある時，偶然にも神谷美恵子「生きがいについて」（みすず書房）に啓発される機会を得て，爾来，最近の二十数年間は，現象学的精神病理学から現象学を経て，現象学的心理学を，学び続けて来ている。そして，2001年現在の時点では，かつては心理学というものに対して私が抱いていた期待，希望，夢，幻想，幻滅，そして，現実認識も，当然のことながら，多種多様な変容を経ており，現在のそれらは，五十年前とは非常に異なってきているところがある。その変容には，この間の，私自身の変化の歴史のみでなく，心理学そのものの変化の歴史も，当然のことながら，自ずと織り込まれている。

さて，私は，自らの一生の大半を心理学の研究に費やし，さらにまた現在も，幸いにも現役の研究者として，研究途上にある者として，言うまでもなく，これからの学問としての心理学が達成する将来の発展に，大いに期待したい，と願っている。しかし，私の目に映る限りでの，現実の心理学の姿は，五十年を経た現在でも，満足すべき学問となっているとは，私には思えない。さらにまた，満足できる学問となる道を突き進んでいるとも，私には思えない。そして，このことについての，この判断に，私自身の人間的誠実さと学問的良心とを賭けるとするならば，残念なことに，それを否定することができない。そして，そのことに心の痛みを覚える。五十年を経た今の私には，そして，もはや残された年月の少ない私には，若い頃の私が，心理学の先輩や他

※　淑徳大学社会学部教授

＊「省察＝自分のことをかえりみて考えをめぐらすこと」

の諸学の先輩たちから，よく聞かされたことのある，「心理学はまだ，誕生間もない若い学問なのだから，現在未熟なのは止むを得ないことなのだ。すべては，これからなのだ。」という勇気づけと慰めの言葉も，どこか空しく響く思いがすることも否定できない。では，この私は，「心理学」への不満，幻滅とやる瀬ない無念の思いを胸に秘めて，このまま，この世を去るのだろうか。私には，長い年月をかけて沈殿させてきた深い悔恨と慙愧の思いがある。この思いが，心理学の「行く末」としての将来に向けて，たとえわずかにせよ，また，たとえ「腐食土」としてであるにせよ，積極的な意義をもつものとして生かされることを望み願うことは，私にも許されることではないか，そう私は思う。そして，私は，この世を去る前に，これからの心理学を担うであろう次の世代に属する，心理学を学ぶ人々としての他者にも理解されうる仕方で，私の現在の思いと考えるところを率直に述べておくことは，大切なことなのではないか，五十歳台を半ば過ぎた頃から，そう思うようになった。そうした思いもあって，以前であれば恐らく書かなかったであろうような，率直ではあるがいささか穏やかさに欠ける文章も，敢えて書くようになった（例えば，吉田章宏　1990）。

言うまでもなく，無数の多種多様な心理学が存在する今日の状況のなかでは，その総ての詳細に通じることは，どのように学才があり勤勉な心理学者であっても，不可能であろう。まして，私のような浅学非才の輩（やから）に，そのようなことが出来ようはずもない。そのような条件の下で，心理学について，またその方法論について，全体的で一般的な議論をすれば，その議論は暴論となることは避けられない，と言べきであろう。そこで，私は，諺「一葉落ちて天下の秋を知る」に加えて，次の自作の「諺」を自らに言い聞かせる。「井の中の蛙，大海を知らず。されど，井の中を知る。大海の巨鯨，大海を知る。されど，井の中を知らず。」（吉田章宏，1996年，188頁）

心理学における「井の中」，また，心理学という「井の中」，を知る一匹の「蛙」（かわず）としての私は，その短い生涯で生きた「井の中」に落ちた一葉から，天下の心理学の研究方法論を論じ暴論を吐く蛮勇を奮い立たせたい，と願う。

そして，この省察の文章を書く，率直に，大胆に。

1．「心（こころ）」，「心理」，「心理学」，「学問」，「研究」，「研究方法」，「研究方法論」という言葉と指示対象

現代の心理学の源は西欧の心理学にあり，「心理学」という言葉は，Psychology（英語）あるいはPsychologie（ドイツ語）などの翻訳語である。確かに，陽明学の「心学」があり，石田梅巌の石門「心学」もあった。しかし，現代の「心理学」の源泉は，日本に固有の「心学」や「心」にあるのではない。そして，一般的には，「心理学」といえば，主として，また概して，実質的

には，ある特定の歴史を経て発展して来たアメリカ心理学の主流を意味するのが今日の実状である，と言ってもよいであろう。

ここでは，既存の心理学のみを主題とするのではなく，「心理学」に可能な姿とそれがあるべき姿を考えることを私は望む。しかし，このことを望んで，「心（こころ）」，「心理」，「心理学」，「研究」，「研究方法」，「研究方法論」，「学問」，「科学」などの言葉の源泉を尋ね，その指示対象を明らかにしようとするなら，それだけで，本論の紙幅はたちまちにして尽きてしまうことになるであろう。

そこで，本論の主題とする「心理学方法論」を思考するに当たっては，人間の思考と意味に関する，現象学者 J. N. Mohanty（1976：2－3）の解明に従って，思考（広く言えば認識）を考える枠組みとして，以下の五つの構成部分からなる全体を思考してみよう。すなわち，“(a) 思考する主体（the thinking subject）；(b) 思考過程（the thinking process, i. e. thinking as a real, temporal, psychological process）；(c) 思想自体（the thought itself）；(d) 言語表現（the linguistic expression）；(e) 思考の対象・客体（the object of thought）.” の五つの構成部分からなる全体構造である。

これら五構成部分の相互関係の構造は，概略的かつ基本的には，とりあえず，次のように考えてよいであろう。すなわち，「思考する主体」が，「思考の対象・客体」を思考する（感覚・知覚・思考過程も含む広義の認識活動としての）「思考過程」を通じて，「思想自体」を形成・獲得し，広義の「言語表現」を介して，それを表現する，と。もちろん，ここで，以上の構造を中心的な枠組みとしながらも，その派生的な亜種としては，例えば，「思考する主体」が，「言語表現」を介し，「思考過程」を通じて，「思想自体」を，さらには，「思考の対象・客体」を，同定するという場合も考えられる。あるいは，五構成部分のうちの幾つかを欠いた，その他の亜種も，思考の対象としては，思考され得る。ここでは，五構成部分の相互関係の基本的構造が，以上のように同定されれば，十分であるとしよう。

例えば，「こころ」は，「言語表現」としては，極めて多義的であることが，既に指摘されている（相良亨，1995年）。この語によって表現される「思考の対象・客体」は，極めて多種多様なのである。それは，むしろ，「こころ」の内容の豊かさを示している，と理解すべきなのではないか。さらに，「心理」が，仮にその多種多様な「こころ」の「理」（ことわり＝物事の筋道）を，いいかえれば，いわゆる「心の法則」あるいは「心の意味と構造」を，指示しているとするなら，そしてさらに，「心理学」が，そのような「心理」を「学問する」「学問」である，とするなら，「心理学」の「研究」とは，「心理」の探究（research），それを繰り返し探し求め究める営みとしての「思考過程」（認識過程・活動）であり，そのような「心理」を「学問する」人間としての「心理学研究者」たちの営みである，と言えよう。「学問する」とは，「問いを学ぶ」ことであり「学ぶを問う」ことである。心理の研究において「問う」ことを，「思考の対象・客体」であ

る「こころ」そのものから，さらには，心理学の研究の先人たちから，学ぶことであり，また，そのように「問う」ことを，対象や先人たちから「学ぶ」こと自体を，さらに「問う」（吟味する）ことである。したがって，その「研究方法」とは，そのような「心理」を目的として求める探究に生かされうる手段であり，媒介の道（“meta-hodos（道）”ギリシャ語）であって，その「研究方法」によって，「心理」が，「思想自体」にもたらされるのである。そのような「研究方法」のうち，「対象・客体」に即したより適切なものを求めて，その適切さの基準とその根拠となる原理についての「思考過程」をも含めて，「学問し」研究するのが「研究方法論」である。以上のように，おおよそ，考えることにする。

さて，以上のように考えるとするなら，「研究方法論」は，(1) 研究の直接的な対象とされる「こころ」から「心理」へ，(2)「心理」から「心理学研究」へ，(3)「心理学研究」から「心理学研究方法」へ，(4)「心理学研究方法」から「心理学研究方法論」へ，という具合に，四重にも五重にも「こころ」から後退したところに位置する研究の営みである，ということになるであろう。この「こころ」と「心理学研究方法論」の間の関係の構造は，イーグルトン（1997年，40頁）が指摘していた，実人生と文学理論との間の関係の構造に酷似している。すなわち，流れを遡るなら，「まず，メタ＝理論というのがある。次に，それが調査の対象として受け取る文学理論なるものがある。それから，多くの文学理論が省察の対象とする文学批評というものがある。さらに，批評の調査の対象となる文学そのものがある。最後に，文学自体の対象となる＜実人生＞なるものがある。」という具合に，「文学理論のメタ＝理論」は，実人生から五段階離れたところに位置している，と彼は言う。この論理に学んで言うならば，「心理学研究方法論」に関わる「思考する主体」は，心理学研究方法論，心理学研究方法，心理学研究，心理，そして，現実の＜心＞という具合に，現実の＜心＞から，少なくとも五段階離れたところに位置している，と言えるかもしれない。しかしながら，心理学の場合，実は，それぞれの段階で，(a) 思考する主体，(b) 思考過程，(c) 思想自体，(d) 言語表現，(e) 思考の対象・客体，が関わるという事情があり，しかも，それらが総て，心理学の視野のなかに入って来る，という事情がある。それゆえ，「思考する主体」が，それらの五段階を，統一され一貫した仕方で，思考すべきであるとするならば，論理的には上記のように，五段階離れているにもかかわらず，一貫し統一された意味と構造で，五段階を重ね合わせなければならない，とも考えられる。

ここで，直ちに難問が発生していることに気づく。確かに，「こころ」を研究の主題とする学問としての「心理学」においては，「こころ」が，「思考の対象・客体」として登場することが認められる。ところが，その同じ「こころ」が，その対象・客体を捉える「思考過程」としても登場する。しかも，研究主体である心理学研究者も，「思考とは無関係な主体」などではなく，ほかならぬ「思考する主体」として，登場する。そして，その「思考過程」（認識過程）たるや，「思想自体」とその表現としての「言語表現」をことの初めから常に既に含みこんでいる。この

複雑に縺れて絡みあった事情をどう解き明かすかは，既にたいへんな難問である。

それに加えてさらに，心理学において登場する「思考の対象・客体」としての人間は，「思考の主体」としての人間でもありうる，という事情が加わる。例えば，人間の身体が「知覚する知覚されうるもの」（メルロ＝ポンテイ）であるのと対応して，人間の我も，いわば「思考する思考されうるもの」なのである。そしてさらに，人間における，自他の未分化から分化へ，原初的自我から，対他自我を経て，対自自我へ，という，自他の多様で重層的な在り方の可能性と変化（田中一彦，1982年，163ページ）という事情がこれに加わる。こうして，少なくとも，「思考の主体」としての「自我」（主我）と「思考の対象・客体」としての「自我」（客我）との間の分化・分裂が起こりうる。もちろん，この分化・分裂は「他者」でも起こりうるのである。これらは，他の諸科学には見られない複雑な事情である。

以上のような複雑な事情を孕んだ「こころ」を研究するに当たっては，「事象そのものへ！」（Zu den Sachen selbst!）と言う格率を信奉し，「自己を示現する者をば，その者がその者自身の方から自己を示現するとおりに，その者自身の方から見せる」（ハイデガー　1960：62）ことを目指すという意味での現象学者であろうと努めることが肝要である，と私自身は考える。しかし，たとえ「現象学者」であろうとなかろうと，その「思考の対象・客体」である「こころ」そのものに迫ることを願うのであれば，そして，いやしくも，心理学的認識に「妥当性」を求めるとするならば，誰であれ，以上の困難な諸事情にこころを配り，幾多の陥穽に陥らぬよう，慎重に思考を進めて行かなくてはならないであろう。

2．心理学における流行と不易

心理学の歴史を少しでも学んでみると，誰でもすぐ気づくことがある。それは，心理学という学問においては，「流行」による栄枯盛衰が甚だしいということである。1879年のライプチッヒでのヴントによる実験心理学の実験室の誕生をもって「科学的心理学」の成立とする正統派心理学の歴史観に従ったとしても，なお，それ以降の歴史的展開は，「流行による盛衰」という言葉がまさに正鵠を射ていることを，私に確信させる。精神物理学を中心におく実験心理学，内観主義心理学，行動主義心理学，ゲシュタルト心理学，多様な新行動主義心理学，そして，精神分析学の諸流派，第三勢力と呼ばれた人間性心理学，近年流行の認知心理学，そして現在流行中のこれまた多種多様な臨床心理学の諸流派，…と，それぞれに心理学の世界における流行と，その変遷の展開は，実に目まぐるしい。が，そこに共通して見られる特に顕著な点は，それぞれに新しい流行の心理学が登場する時点において，その直前に流行していた心理学の理論と事実が，引き継がれ，克服され，新たに登場する心理学に統合されて，より一層「学問的」あるいは「科学的」で，より一層信頼できる新しい統合的な一つのより豊かな心理学が生まれるということには「なっ

ていない」ということである。古い心理学が新しい心理学に「止揚される」(aufhebenされる，否定されながら，より高い段階で活かされる）ということには，「なっていない」ということである。むしろ，多くの場合，それ以前の心理学が破棄されて，全く新しいタイプの心理学が出現したのだと理解される。そのようにして，歴史が進行してきている，ということである。ことに，心理学研究の対象・客体であるはずの日本語で言う「こころ」(英語で言えば：Psyche, Soul, Mind, Spirit, Heart, など）の把握あるいは理解が，安定していないことは，一つの名称「心理学」を共有する研究者とその研究活動の集合体としては，むしろ，驚きに値さえする。例えば，内観主義心理学や意識心理学における心理学研究の対象と，行動主義心理学における心理学研究の対象と，両者を比較すれば端的かつ容易に見られるように，心理学の対象としての「こころ」の把握が，それぞれに同じ「心理学」と自称も他称もされる研究でありながら，相互に極めて異なるという点が，あまりにも，際立っている。そもそも，果たして，心理学において「こころ」や「心」,「心理」が共通の研究対象として承認され続けて来ているかどうかということさえ，極めて疑わしい。まして，「こころとは何であるか」の問い（“What is the Psyche／Soul／Mind／Spirit／Heart?”）に対して，総ての心理学研究者が合意できる答えが得られる可能性は，殆ど無いといってもよいのである。例えば，表題に「知覚の諸理論」,「学習の諸理論」,「発達の諸理論」,「人格の諸理論」…などの，英語で“Theories of...”を冠した代表的な米国大学院レベルの心理学の専門的テキストが存在する。その内容を見れば，これまた周知のように，いずれも，並列的に「諸理論」を紹介するもので，諸理論を全体として統合して示す性格のものではない。むしろ，そのような統合が，そもそも可能だとは考えられてはいないという状況認識を，それらのテキストは自ら積極的に確認し，鮮明に示してくれているようにさえ思われて来る。そして，一方では，諸理論の少なくとも表面的には「平和共存」状態を公平に紹介し，指し示めしつつも，他方では，厳しい現実として，それぞれの時代あるいは時期における「流行」による諸理論それぞれの学界支配の歴史があり，それぞれの学界の檜舞台への登場と順次の退場，研究と普及の栄枯盛衰の移り行きを，意図すると否とにかかわらず，暗黙のうちに伝えている，とも考えられるのである。そこで，もし，学習者がテキストの叙述するままに従って，素直に柔順に学習するなら，その学習者は，相互の関係については曖昧なまま，並列する諸理論と諸事実の共存する雑多で統合されない大量の知識を習得する状態に留まり，それを超えた統合的な心理学像あるいは心理学理論像を獲得するには至らないことになる。しかし，専門の心理学研究者としては，それらの諸理論のうちから，いずれかの一つあるいは少数の学派あるいは理論を，「何らかの理由」で選んで，あるいは選ばされて，それらの学派あるいは理論に基づいて，その範囲内で専門家として研究することで，研究者としての，その後の研究生活を送ることが可能であるし，またそうなるのが，むしろ通例でさえある。また，仮に，「統合する」ことが問題となっても，複数の，せいぜい二つの学派あるいは理論それぞれの主要な諸概念の間の関連づけがなされるに留ま

る。例えば，精神分析学と新行動主義心理学の関連づけ（例えば，ミラー／ダラード），新行動主義心理学とピアジェの発生認識論との関連づけ（例えば，バーライン），などといった具合に，である。こうした状況から浮かび上がってくる教訓がある。一つは，これまで存在したすべての心理学研究あるいは心理学理論の統合など，だれも真剣には考えていないし，それは，ほとんど不可能な企てで，それを試みようとするのは恐れを知らぬ愚者の行為である，とさえ考えられている（らしい）ということである。

この私の個人的印象は，*Psychology: A Study of a Science.* の大冊全6巻を編集したSigmund Kochが語っている観察の言葉とも符合している。コッチはこう言っている。「『心理学』という語で指示される諸活動の本質的な纏まりの無さ（noncohesiveness）を，この語［心理学］を，たとえば，『心理学的諸研究』というような言い回し（locution）に置き換えることによって，［心理学者たちは］自認すべきである，と私は提案する。…現存のもろもろの『心理学科』は，『心理学的諸研究の学科』と呼ばれるべきである。」と。そして，さらに，次のようにも言う。「最低限でも，学生たちは，彼らの教授たちがとっくの昔に解くことを諦めてしまったジグソウパズルのたくさんの断片を［一つの纏まりのある絵に］まとめ上げることが，自分たちの責任であるなどと信じるようには，励まされ仕向けられるべきではない。このパズルは，原理的に，解決不能なのであるから。…」と（Koch　1999：134－135）。言い換えれば，ほとんど総ての心理学研究者たちは，「心理学」という一つのまとまりをもった学問を目指すことを，「とっくの昔に」諦めてしまっている，というのが，慧眼なコッチの観察なのである。そして，私自身も，それが事実である，と信じる。

例えば，今日でも用いられている，1975年に日本で刊行された「心理学研究方法論」の標準的なテキストには，ある高名な心理学教授O氏の言葉が次のように紹介されていた。すなわち，「現代の科学的心理学の方法に対して，現象学的方法と了解的方法（精神分析学的方法はこれに含まれる）を別系の方法とし，それらが研究方法というよりはむしろ“臨床技術”であると断定し，心理学の今後の発展とともに，それらが漸次その影をひそめていくことが期待されるとしている」（八木　1983／1975：ii）と。この言葉は，少なくとも，「心理学」，「方法」，「科学」についてのある思想を表現しており，Sigmund Kochの言葉が日本においても妥当することを確認している，と言ってよいであろう。

それぞれの心理学理論には，存在論上および認識論上，固有の視点がある。にもかかわらず，それぞれの固有の視点が自覚されていないということがある。そして，そのことの当然の帰結として，その多様な視点相互の根本的な異同と関連が自覚化されない，という結果が生まれる。視点相互の間の巨視的な全体的関連づけが出来ない，という結果も，生じている。そのため，仮に心理学諸研究間の関連づけが行われても，末梢的な事実や個々の論点の表面的な関係づけに留まるという結果が生じている。

こうして，本来ならば，「心理学」全体を次第に豊富化して，心理学全体が統合化に進むことに貢献してもよいはずの，個々の研究と諸事実と諸理論が，仮に，それぞれの心理学理論・研究のそれぞれの個別領域（「縄張り」）内部における，局地的な，理論と事実の豊富化をもたらしているとしても，心理学全体の豊富化と統合化をもたらす方向には働かない，という結果が生まれる。心理学内部の「タコツボ化」現象である。

この状況は，心理学が哲学から独立して，自然科学を模範としつつ，普遍的な永遠の一般法則を追究するはずの，客観的な自然科学としての心理学の建設を目指してきた，という歴史的経緯を思うならば，少なくとも，遺憾で不本意な状況であり，多分に皮肉な状況であり，満足できるにはほど遠い状況である，と言わなければならない。

仮に，「心理学の諸法則」なるものが存在するとするなら，「心理学の諸法則は『永遠の』法則ではない，それらは歴史的法則である。発達・発展のおのおのの段階において，それらは異なる」（ルビンシュテイン　1981／1946：86）という，マルクスが初めて定式化したとされる「偉大な思想」を受け容れるとしよう。しかし，そのことと，上記の心理学における，自覚の欠如から生まれる，「止揚」と統合の欠落による，流行による栄枯盛衰とは，全く別の事柄であると，私には思われる。さらにまた，心理学においても，流行のみでなく，変化を通じての不変なるもの，万古不易なるもの，を目指す追究が，言うまでもなく，あって然るべきであると私は考える。さらに，心理学において不易なるものの追究がありうるとするならば，心理学の方法とその方法論においても，不易なるものの追究がありうるはずである。心理学の歴史と現状，将来のあるべき姿を考えるとき，そのような追究には大きな意義がある，と私は考える。

3．心理学方法論における不易なるもの

そこで，「心理学方法論における不易なるもの」の一つの追究を試みる。

「不変・不易なるもの」は，恐らく，人間の心理に関する根源的な原理となる事柄に隠されているであろう。人間の心理に関して「不易なるもの」として，直ちに，私の心に浮かんでくるのは，W．ジェームズ（1981／1890）が述べていた「世界の分割線」のことである。ジェームズはこう書いている。「人類全体としては，何に注目し，名前を付けるか，などということについて，大凡は，一致している。そして，それら注目した諸部分の間でも，強調点や好み，あるいは，軽視や嫌悪などに，大体は同じ仕方での選択をする。しかしながら，ここに，如何なる二人の人間も同じ選択をすることが決して無いということが知られている，一つの全く異常な事例が存在する。全宇宙の二つの半分への巨大な二分割は，我々一人ひとりによって為されており，我々一人ひとりは，その殆どの関心を，それら二つの半分のうちの一方に向けている。にもかかわらず，我々は皆，それら二つの間の分割線を，ある［互いに］異なる場所に引いているのである。我々

は皆，これら二つの半分を同じ名前で呼んでいる，そして，それらの名前は，それぞれ，“我”（me）と“非我”（not-me）である，と言えば，私が言っていることの意味は，直ちにお解りいただけることと思う。」（同前書：277－278）

以上の鋭い指摘を前提とするなら，心理学の研究において，研究者が，研究の対象として，「自分の心」をえらぶか，あるいは，「他人の心」を選ぶかは，その心理学研究において，根本的な差異を生む選択である，はずである。しかし，内観主義心理学の衰退以降，これまでの客観的な「科学的心理学」で，研究者が「自分の心」を研究対象とすることは，ほとんどタブー（禁忌）にも近い形で禁止され，回避されてきていることは，これまた周知の通りである。この点に関連して，戸川行男がその著書「『私』心理学への道」（1988年）において，「客観的科学的心理学」を「他人・心理学」と呼びつつ，それと区別される，自分の心を対象とする「私・心理学」への道を提唱していることは，十年以上を経た今日においてもなお，注目に値する，と信ずる。彼は主張している，我々は，「あらゆる心理学的研究に先行して，研究者自身による，研究者自身についての，『私・心理学』的研究を行わなくてはならない」と。さらに，「自分にとって，自分はわからないでも他人はわかるのであろうか。『私・心理学』を人が奇とすれば，むしろ，自分自身・私がわからず，私を棚あげにして他人だけを云々する『他人・心理学』こそ，不思議とされるべきではないか」（同前書　1988：150）と。このことは，ことに人間的に深刻な「こころの出来事」の研究においては，重大な意味を持つことになる。「他人」の研究と「私」の研究は，内容の豊かさと深さに関して，互いに呼応するからである。さらに，低次元の精神の「私」が高次元の精神の「他人」を心理学的に研究する可能性如何の問題も提起される。たとえば，発達心理学において，ピアジェの言う具体的操作段階の子どもに，形式的操作段階の子どもの心理を研究することは可能か，などの具体的な問題が提起されうる（吉田章宏　1984）。

「他人・心理学」については，さらに，「汝・心理学」［“You-Psychology”］（私と直接的な関係を有する「汝の心」の研究する心理学）と「彼・彼女・心理学」［“S／he-Psychology”］あるいは「誰彼（たれかれ）心理学」［“Anybody-Psychology”］（私とは直接の関係を有しない「彼・彼女」あるいは「誰彼」「誰でも彼でもかまわない」人間一般の「心」一般を研究する心理学）との二者を区別しておくことが，適切であるように，私には思われる。念のため，同様の規定を，「私・心理学」［“I-Psychology”］について記すなら，「私・心理学」とは，研究者が，自分自身の「心」を対象として研究する心理学，ということになる。とすると，心理学の可能性としては，少なくとも，第一人称態，第二人称態，第三人称態という三つの人称態の心理学がありうる，ということになってくる。

4．三つの人称態の心理学

心理学の人称態について，主題化して，私自身が自ら考え始めたのは，「内観法」（introspective method）について文献を調べたり考えたりしていた1970年のころであった。「内観法」は，アメリカ心理学では，行動主義心理学の余韻で，まだタブー視されていた頃のことである。ただし，既に，1960年ころから，ルビンシュテインの著「存在と意識」（1960）に親しんでいた私は，「内観法」についての批判的ではあるが肯定的な考え方や，「外的観察」に対比される「自己観察」（ルビンシュテイン　1981／1946：64－70）の概念にも，既に親しんでいた。また，情報理論研究者のDonald. M. Mackayの「観察者言語」（“observer language”）と「行為者言語」（“actor language”）の区別（Mackay 1969）を，授業研究者と授業実践者との，研究上の関係を考える上で，魅力的に感じたりもしていた。しかし，このことが，心理学における，また，心理学方法論における，根本問題の一つである，と私が考え始めたのは，荻野恒一著『精神病理学入門』（1964）の中にある「三つの心理学」についての叙述に触発されてであったように記憶する。

荻野は，概略，次のようなことを述べている。「一人称の心理学」とは「内省」つまり「自分のこころの現象を自分自身で省察してゆこうとする方法」による「こころに関する学問」で，「我による『我の心理学』」である。「二人称の心理学」とは，「自分のこころの現象」ではなくて，「他人のこころの現象」を「理解」しようとする心理学である。ただし，その他人は「『わたくしとの深いかかわりにおいて，わたくしの前にいるひと』であるとき，わたくしの人生にとって，あるいはそのひとの人生にとって，二人の『出会い』が厳粛な事柄であるとき」，そして，その他人は「いまの状況で，他の人に代えることのできないひと」，「こころから汝とよびかけなければならない相手」（同前書：207－208）である。そのような状況での相手である「他人のこころ」の学問，それが，「二人称の心理学」であり，「我による『汝の心理学』」である。そして，荻野の言う「三人称の心理学」とは，広い意味で，「他人のこころの現象」を，「理解」ではなくて，科学的に「説明」しようとする「科学的心理学」である。その「科学的説明」の仕方は，自然科学の「因果的説明」に学ぶことにより，心理学を哲学から解放して「科学」にすることを目指している。この場合の「他人」は，「だれそれとよびうる任意のひと，無人称的な性格をもったひと，簡単に『かれ』とよんで済ましておけるひと」（同前書：206）である。これは，「我による『彼／彼女の心理学』」であろう。歴史的には，ギリシャ以来，哲学において，「一人称の心理学」が行われ，ついで，19世紀の自然科学の隆盛に動かされて，自然科学的な「三人称の心理学」が興隆し，さらに，精神病理学などの治療実践から，人間科学的な「二人称の心理学」が，出現している，という遠大な展望を提出している。まず，一人称心理学，ついで三人称心理学，そして，二人称心理学，という順序で展開して来た，というのである。広義の心理学，哲学におけるギリシャ以来の「心理学」と呼ばれて来た学問に関して，歴史的大局観から見れば，以上の荻野の指

摘は妥当である，と言えるのであろう。しかし，以上の歴史的発展の経過を踏まえつつも，これからの心理学の展開を考えるに当たっては，心理学という学問の論理的な可能性という点からも，もう一度，この問題を，見直してみることには，価値があり，また，その必要がある，と私は考える。

さらに，「三つの人称態」ということの重要性について，私に確信を持たせてくれる見解を，私は，ジャンケレヴィッチの『死』(1978) に見いだした。すなわち，彼は言う，「第三人称態の死は，死一般，抽象的で無名の死，あるいはまた，たとえば，一人の医者が自分の病気を検討する，ないしは自分自身の症状を研究する，あるいは自分自身に診断を下すというようなふうに，個人の立場を離れて概念的に捉えられたものとしての自分の死だ。」「第三人称態の死，……それは他の対象と同様な一対象，人が医学，生物学，社会，人口統計の観点に立って記述し，ないしは分析する一対象であり，その場合には，悲劇性をもたぬ客観性の極致を代表するものだ」(同前書：25)。「第三人称が平静の原理なら，第一人称は疑いもなく苦悶の源泉だ。わたしは追いつめられた。」第一人称の死では，「わたしはこの問題に対して距離を保つことができず，密接に粘着する。わたしのことが問題なのだ！わたしが問題なのだ。死が個人的にわたしの名で呼ぶわたし，他人を指さし，袖を引き，隣人のほうに横目をつかういとまを与えぬわたしだ。……もっとあとへの延期，そしてまったく同様にして，アリバイもだれかへの転化も不可能になった。」そして，「第二人称態の死」は，第三人称の「無名性」と第一人称の「悲劇の主体性」との間の，「中間的でいわば特権的な場合」である。「遠くて関心をそそらぬ他者の死と，そのままわれわれの存在である自分自身の死との間に，近親の死という親近さが存在する」，「親しい存在の死は，ほとんどわれわれの死のようなもの，ある意味ではわれの死とほとんど同じだけ胸を引き裂くものだ。父あるいは母の死はほとんどわれわれの死であり，ある意味では実際にわれわれ自身の死だ」(同前書：29)。

ここで，ジャンケレヴィッチの場合，「自分の死」であっても，「一人の医者が自分の病気を検討する，ないしは自分自身の症状を研究する，あるいは自分自身に診断を下すというようなふうに，個人の立場を離れて概念的に捉えられたものとしての自分の死」は，「第三人称態の死」と見なされていることは，注目しておく必要がある。それは，「死」をどのように捉らえるか，という「捉らえ方」(「思考過程」) による区別と，捉えるのは「誰の死」かという「対象」(「思考の対象・客体」) による区別とが，死の三つの人称態の区別の中に混在させられていることを意味するからである。「死」についての区別は，ここではさて措く。心理学の研究方法を主題として考える立場からは，心理学の区別としての「人称態」による区別は，基本的には，その心理学が主題とする心理が，直接的・根源的には，「誰の心」(我，汝，彼／彼女・誰彼) を主題としているかということによる「思考の対象・客体」の区別として，一方に立てることが必要である。他方では，この区別とは別に，その「捉え方」(「思考過程」) の在り方による区別を立てる必要

がある。そして，両者を，少なくとも一旦は，峻別しておく必要がある，このことに，ここで，私は気づかされたのである。

さて，考えてみると，「誰の死」を主題とするかという「三つの人称態」による経験の質の典型的な差異の大きいことは，実は，「死」には限らない。例えば，「愛」，「憎しみ」，「喜怒哀楽」，など実存的に深刻で強烈な経験には，この差異が，例外なく，見いだされるからである。そして，さらに私が気づいたことは，当時，私が研究していた「授業」や「教育」についても，同様の三つの人称態による差異が，歴然として存在している，ということであった。例えば，一つの「授業」という出来事において，(1) 教師としての責任において主体的に授業を行う経験，(2) 一人の子どもとして授業に参加して学習する経験，(3) 授業者研究者として授業における教師と子どもたちの間のやりとりとしての「授業」を第三者的に，いわば傍観者として，観察する経験，これら三種の経験(1)，(2)と(3)の間には，相互に歴然とした差異がある。ただし，この場合の，授業研究者も，「授業」の研究において，「授業研究者としての経験」においては，決して第三者的ではなく，第一人称的であるという重要な点に，注目しておかなくてはならない。もちろん，三つの立場に立って経験している者たちの経験の間には，同一の出来事としての「授業」の経験としての共通性も同一性も，当然存在する。さらに，それぞれの種類の経験の中でも，個人により，時空と場により，歴史により，さまざまな差異と同一がある。そこで，例えば，「授業の心理学」の主題とする経験は，誰の経験であり，その経験には，誰が，どのようにして接近可能（accessible）であるか，ということが，ちょうど「死」，「愛」，「憎しみ」，「喜怒哀楽」，…などの経験を主題とする場合と全く同じように，主題化して考えなくてはならない問題として，立ち現れて来たのであった。「死」の問題は，それを一層鮮明に浮き彫りにしてくれたのである。

「授業」という出来事に即して，一人の授業者を「研究主体」と考えた場合で，研究対象としての「授業者のこころの出来事」を研究する場合について，授業実践者を心理学研究者になぞらえて，具体的に考えることを試みてみよう。例えば，経験の記述・記録として，授業者の第一人称態としては，「研究主体」としての私の畏友，授業者・武田常夫が『真の授業者をめざして』(1990) において語っている自らの授業経験，例えば「走れメロス」（太宰治作）の授業の準備から実践そして後での反省の経験，あるいは，『文学の授業』(1964) で語られている詳細な授業体験の記録群，などからの，武田自身の「こころの出来事」の研究は，武田による「我の心理学」の形態として，考えることができる。第二人称態としては，武田常夫が，『真の授業者をめざして』に記録しているように，同僚の他の教師たちにそれぞれの授業の経験を語ってもらい，それに傾聴して，その言葉を記録している，その記録からの，それら教師たちの「こころの出来事」の研究を，武田による「汝の心理学」の形態として，考えることができる。そして，第三人称態としては，同じ武田が，のちに指導主事として，多くの学校での教師たちの授業を，言わば授業の第三者的観察者として，授業観察して記録した経験の記録からの，授業者の「こころの出来事」

の研究を，武田による「誰彼の心理学」の形態として，考えることができる。授業者の「こころの出来事」の研究は，授業実践者としての武田おいては，決して，三つの人称態のどれかに限定や制限などされてはいない。三つの人称態の接近の総てを駆使しており，その過程で，実践者としての武田の授業理解と実践力が豊かになって行ったことは，明らかである。こう考えてくると，生きた人間による実践と研究において，三つの人称態の接近の総ての駆使を禁じ制限することが，必然性の無い制約である，と見え始めることに気づくのである。

かつて，城戸幡太郎（1968）は，「心理学における三つの存在命題」を提唱し，こう書いた。「これまでの心理学はその対象と方法から，（一）自己の意識を内省法によって記述するもの，（二）他人の精神や性格を解釈法によって理解するもの，（三）動物や人間の行動を操作法によって説明するものがある。しかし，それらの対象と方法は三つの心理学を成立させるものではなく，一つの心理学を秩序づける論理をもたなければならない。それが心理学における三つの存在命題である。」として，「第一命題：経験の自覚による（方法）意識の構造（課題），第二命題：表現の理解による（方法）精神の意味（課題），第三命題：行動の操作による（方法）生活の形成（課題）」（同前書：578）を挙げていた。これらには，歴史的にそれぞれ，内観主義心理学，了解心理学，行動主義心理学が対応している，と考えられる。歴史的に成立した具体的な流派の心理学について考えるなら，確かに，以上のような限定された対応が観察されるかもしれない。この対応を現在も生きている「歴史的対応」あるいは「現対応」と呼ぶことにする。この対応は十分に参照され，その成立の事情は考究され，尊重されるべきであろう。しかし，将来の心理学の可能性を探究するに当たっては，むしろ，「現対応」を超えて，より具体的に，例えば，授業実践者・武田常夫における認識の多様な在り方に見られるような，生きた人間における心理学的な学問の営みの可能性に立ち返って，より開かれた可能な在り方を想像し，さらに新たな研究方法の創造に向けた，新たな可能性の探究こそが行われなければならない。

心理学における，これまでの私の経験の経緯と以上の議論から，私は，心理学の在り方に，少なくとも論理的な可能性として，人称態による「三つの心理学」（「我による『我の心理学』」，「我による『汝の心理学』」，および，「我による『彼（誰彼）の心理学』」）の区別を考えなくてはならない，と確信するに至った。それぞれは，それぞれの存在理由を十分にもち，将来も，それぞれの存在の可能性と必然性，そして必要性がある，ということを私は認める。「三つの心理学」それぞれの研究方法の可能性はどうか。それが，これからの省察の主題となる。［今後は，便宜上，それぞれを，「我心理学」，「汝心理学」，「誰彼心理学」，と略称する。］

おわりに

いまや，心理学における「思考の主体」と「思考の対象・客体」の組合せのみによる，単純化

された仕方で，我，汝，誰彼の三つの心理学が同定され，確認された。それぞれに即して，心理学の研究方法の具体的な可能性を探究する準備は調った。私の眼前には，新しい展望が開けて来ている。その展望の発表は，紙幅の制約から，次の機会にゆずる。研究方法の豊饒化と統合化による，将来の心理学のさらなる発展に向けて，今後とも，真摯な探究を続けたい。

引用文献

イーグルトン，T. 著　1997　山形和美訳『理論の意味作用』法政大学出版局

荻野恒一著　1964『精神病理学入門』誠信書房

城戸幡太郎著　1968『心理学問題史』岩波書店

相良亨著　1995『一語の辞典　こころ』三省堂

ジャンケレヴィッチ著　1978　仲沢紀雄訳『死』みすず書房

武田常夫著　1990『真の授業者をめざして』国土社

武田常夫著　1964『文学の授業』明治図書

田中一彦著　1982『方法論からの心理学』勁草書房

戸川行男著　1988『「私」心理学への道』川島書店

ハイデガー，M. 著　1960　松尾啓吉訳，『存在と時間』上下 勁草書房

八木冕編　1983／1975『方法論』心理学研究法1 東京大学出版会

吉田章宏　1984「発達理論」，鹿取広人編『発達Ⅱ：個体発生』現代基礎心理学 第10巻 第9章，東京大学出版会，253－276.

吉田章宏　1990「『教育心理学』に期待する一つの遠未来像：僻地にある『迷える小羊』から見たその眺望」『教育心理学年報　第29集 1989年度』日本教育心理学会 142－153

吉田章宏著　1996『子どもと出会う』岩波書店

ルビンシュテイン，S. L. 著　1960　寺澤恒信訳，『存在と意識』青木書店

ルビンシュテイン，S. L. 著　1981／1946　秋元春朝，秋山道彦，足立自朗，天野清，佐藤芳男，松野豊，吉田章宏，共訳『一般心理学の基礎1』全4巻，明治図書

James, William　1981／1890 : *Principles of Psychology,* Harvard UP.

Koch, Sigmund　1999 : *Psychology in Human Context,* The Univ. of Chicago P.

Mackay, Donald. M.　1969 : *Information, Mechanism and Meaning,* MIT P.

Mohanty, J. N.　1976 : *Edmund Husserl's Theory of Meaning,* Martinus Nijhoff